

幼稚園

企画課管理用 教 — B — 1

推進主体	幼稚園
責任者	幼稚園長

分類	実施計画	開始年度	完了年度	将来的な継続
教 — B	遊びの質を高める保育実践の向上	令和 4 年度	令和 8 年度	あり(予定)

① 目的・内容

幼児教育・保育の質の向上への関心が国際的に高まっている。OECD幼児教育・保育白書第6部ではカリキュラムと保育従事者の質に焦点化している。新幼稚園教育要領(2018～)はその「質の確認の視点」として作られている。

幼稚園ではそれらを踏まえ、園の理念を守りながら実際の毎日の現場にどう反映させるかを考えなければならない。日々変化していく幼児の多様な遊びの中身を深く正しく捉えるのは現実難しい。遊びの質を見る視点は保育従事者の質に直結する。先を見通した園児一人ひとりの育ちを確実に捉えるために、教員間の日々の話し合いによる目指す保育の共有を習慣化することで、園児・遊び・育ちを各々がしっかりと捉えることとしたい。

子どもが自然に主体となる環境整備の工夫と共に、教員の園内外での研修の実施をさらに積み重ね、またより充実した子ども主体の生活を作り上げていく為の、行事の改善見直しを図っていく。

② 到達目標(数値目標/定性目標) ※数値目標を設定できない計画は、定性目標を設定すること。

現場の実態に合わせて保育実践の具体化が進み、質の高い遊び環境の構成及び幼稚園教育要領の理解が教員一人一人に深まること。

③ ロードマップ

年度	令和3年度 (2021年度)	令和4年度 (2022年度)	令和5年度 (2023年度)	令和6年度 (2024年度)	令和7年度 (2025年度)	令和8年度 (2026年度)	令和9年度 (2027年度)
予定		園内外研修の実施・行事の見直し					

④ 数値目標の詳細 ※設定できない計画については記載不要。

指標の名称		指標の定義(計算式/説明)					
1	直近	令和4年度 (2022年度)	令和5年度 (2023年度)	令和6年度 (2024年度)	令和7年度 (2025年度)	令和8年度 (2026年度)	令和9年度 (2027年度)
目標							
実績							
2	直近	令和4年度 (2022年度)	令和5年度 (2023年度)	令和6年度 (2024年度)	令和7年度 (2025年度)	令和8年度 (2026年度)	令和9年度 (2027年度)
目標							

(様式2) 実施計画書 兼 報告書

⑤ 実施計画／実施報告		
年度	実施計画	実施報告／今後の課題
令和4年度 (2022年度)	<ul style="list-style-type: none"> ・園児一人一人の育ちの把握を教員間で共し、「遊び」についてより深く認識するために、保育後の話し合いの時間を今後更に頻繁に作り習慣化する。 ・個々の教員が園児の姿をどのように捉え、支えていくのかを具体的に話し合い、教育方針や教育要領との関連を意識しながら、遊びの中での一人一人の育ちの方向性を見据え翌日以降の保育につなげていく。同時に必要な外部研修に積極的に参加する動機付けとする。 ・行事の目的を改めて教員間で考える機会を持ち、園児にとって必要な行事の形を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・保育後の話し合いは、「日々・都度」の形で行った。全体には、朝時間を利用し全教員と情報を共有した。「日々・都度」の形が習慣化するのがよい。 ・園児の姿の捉え方、支え方に関しては、学校評価の取り組みも絡めて、学期ごとに話し合いの場を設けた。 ・コロナ禍で今までのように実施できない行事もあり、感染者の動向とともにその方法を変えてきた。そのたびに行事の目的・原点を再確認し、必要不必要を考え実施につなげてきた。今後も、行事の本質(園児にとって必要な行事)を都度考えながら進めていくこととしたい。
令和5年度 (2023年度)	<ul style="list-style-type: none"> ・「遊び」についてのより深い認識を持つための試みは今年度も継続していく。保育の場での気づきや、保育後の教員間の話は、都度行っていくことが望ましいため、毎日の欠かせない習慣として実施する。 ・4月より、新任教員を2名迎えることで、今一度保育の基礎基本を全教員で見直すつもりで、教育方針や教育要領との関連を意識しながら、話し合いの場を多く設ける。 ・個々に受講した研修についても、全体で情報共有を図る機会を設ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園の行事がコロナ前にほぼ全面的に戻ったが、コロナ前の行事の経験がない教員の方が多いため、一つ一つの行事を丁寧に直し、その目的や園児にとって大切なことを話し合い、共有しながら進めていった。 ・個々の園児についての話し合いは、努めて毎日保育後に行ったが、2学期は入試やお餅つき等大きな行事が続き、まとまった時間を取ることが困難であった。 ・研修については、事前に良い研修を教員間で共有し、勤務時間外に自宅でオンライン受講をしたことで、翌朝皆で情報共有することができた。
令和6年度 (2024年度)	<ul style="list-style-type: none"> ・個々の園児に関するケースカンファレンスを、よりたくさん行うようにしたい。 ・具体的なケースを出して話し合うことが最も必要であり、様々な新しいタイプの園児に対して、時に園医や保健室の看護師の意見を取り入れながら、柔軟に対応できるように学びの場を設けていきたい。 ・また、個々の園児のより良い成長のため、ご家庭との協力体制の強化や、個別の幼児に特化した外部研修を選び、積極的に学び、現場に還元できるようにしていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教員全体で園児一人ひとりの育ちを検討し共有するケースカンファレンスを行った。中でも発達の偏りや特徴による対応の難しさを抱えるケースがあげられた。 ・小児の神経発達を専門とする園医による園内研修『『気になる』お子さんへの対応』を行い、正しい知識に基づいた支援のあり方を学んだ。また、園医による園児の行動観察を行い、教員の関り方への指導を依頼した。個々の事例を通して教員が子どもの発達への深い理解を得る学びがあった。
令和7年度 (2025年度)	<ul style="list-style-type: none"> ・多角的な視点で園児の支援を検討するケースカンファレンスは必須であり、いっそう丁寧に行っていく。 ・今後ますます必要とされる発達に関わる正しい知識、理解を深める園内研修の充実を検討している。個々の特徴に合わせた実践的な指導力を養う園内研修の導入も検討する。 ・教員間で、互いの技術や経験を伝えあう学び合いの時間が必要であり、基本的なクラス経営、保育技術の習得を目指す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発達に関して配慮が必要な園児についてのケースカンファレンスを充実させた。具体的な園児の生活上の躓きに対し教員と保健室がチームであたることにより、園児への理解が進み、個別の環境整備が可能となった。 ・小児発達の専門医による園内研修も昨年より回数を増やし実施した。多様な発達課題への観点を養うことは、園児一人一人を尊重する保育の姿勢につながるものとなっていくため、より一層力を入れるべき課題である。
令和8年度 (2026年度)	<ul style="list-style-type: none"> ・令和7年度実施の幼稚園ブランディングWGでは、幼児教育への期待として「遊びの中で育まれる自主性、主体性」が大きいとの分析があった。創設以来続く学習院幼稚園の保育姿勢「遊びの中での思考力・創造力の醸成をはかり、主体的な態度を育成する」という原点にもどり、豊かな遊びの生活づくりに力を入れていく。 ・発達課題については、より一層の理解を進めて行く必要があり、正しい知識に基づく配慮を行うことが求められている。同時に就学に向けて集団生活への適応を両立する支援について検討していく必要がある。 	